

## 【研究ノート】

# 第二言語としての日本語の格助詞脱落 —Kanno (1996) の概観とその応用可能性—

鈴木 一 徳\*

Case Particle Deletion in Japanese as a Second Language:  
A Brief Review of Kanno (1996) and Its Applicability

SUZUKI, Kazunori

要旨：本稿は、言語学的アプローチによる第二言語習得研究を踏まえた言語教育への応用を検討するものである。研究の例として、Kanno (1996) を取り上げ、批判的検討を行い、言語教育への応用可能性を議論する。特に、「教えられていないにもかかわらず身に付いている言語知識」に着目し、最近の研究動向ともあわせて、今後の展望を述べる。

キーワード：第二言語習得 言語学的アプローチ 格助詞脱落 英語  
母語話者 日本語教育

## 1. はじめに

本稿では、言語学的アプローチによる第二言語習得研究の例として、Kanno (1996) を取り上げ、批判的検討を行い、言語教育への応用を考察するものである。特に、「教えられていないにもかかわらず身に付いている言語知識」に着目し、最近の研究動向ともあわせて、今後の展望を述べる。

本稿の構成は以下の通りである。2節では、言語学的アプローチによる

---

\*すずき かずのり 文教大学文学部英米語英米文学科非常勤講師

第二言語習得研究の目的を述べる。3節では、例としてKanno (1996) を取り上げ、研究の概観をする。Kanno (1996) の批判的検討や今後の解決すべき課題は4節で議論をする。そして、5節では、応用可能性について、最近の動向を交えながら検討をする。

## 2. 言語学的アプローチによる第二言語習得研究と言語教育

第二言語習得研究の研究目的は多岐に渡るが、言語学的アプローチによる第二言語習得研究では、科学的な方法論に基づいて学習者が第二言語を習得するメカニズムを解明することが主たる研究目的である (Hawkins, 2001, 2019; Slabakova, 2016; White, 2003)<sup>1)</sup>。そのため、言語学的アプローチによる第二言語習得研究では、言語教育に関する提言はほとんどなされてこなかった。

言語教育のコンテキストでは、「教えられて身に付く言語知識」や「教えられたのに身に付かない言語知識」に重きがおかれ、「教えられていないにもかかわらず身に付いている言語知識」はあまり着目されてこなかった。しかし、言語学的アプローチによる第二言語習得の研究成果からは、「教えられていないにもかかわらず身に付いている言語知識」を客観的に観察することができる。

「教えられていないにもかかわらず身に付いている言語知識」には、2つの可能性がある。1つ目は、母語からの (正の) 言語転移である。母語の言語知識をそのまま第二言語にも適応させ、それが第二言語でも適格な使用になる場合である。2つ目は、普遍的な言語知識である。母語に存在しない言語規則であるのに、第二言語で適格な使用になる場合である。

次節以降では、Kanno (1996) を取り上げ、内容の概観、批判的検討、日本語教育への応用可能性の議論を行う。

---

1) 言語学的アプローチの中にも様々な研究領域があるが、本稿では生成文法的アプローチを指す。

### 3. Kanno (1996) の概要

Kanno (1996) は、英語を母語とする初級の日本語学習者を対象に、日本語の格助詞脱落を問う実験を行った。実験結果から、初級学習者であっても格助詞脱落に関する振る舞いは日本語母語話者と同等であることを示し、第二言語習得における普遍文法の役割を論じた。

日本語と英語では格標示の方法が異なる。日本語は格標示をするのに助詞（格助詞）を用いる。他方、英語は語順が格標示をする。さらに、日本語の場合、特に話しことばになると、格助詞の脱落は頻繁に起こる。しかし、日本語の格助詞の脱落は自由に起こるものではなく、ある一定の規則に則って起こるものである（久野, 1973）。

(1) は他動詞の文の例である<sup>2)</sup>。(1a) は、主格の格助詞「が」および対格の格助詞「を」が明示的に現れている。(1b) は主格の「が」が脱落した文であり、不自然であるという。一方、(1c) は対格の「を」が脱落した文であるが自然であるという。

- (1) a. ジョンがその本を読んだ
- b. \*ジョン  $\phi$  その本を読んだ
- c. ジョンがその本  $\phi$  読んだ

(Kanno, 1996: 319 (1), 原文ローマ字)

(1) の自然さ・不自然さ（または適格性・不適格性）に関しては、Fukuda (1993) の「空範疇原理 (The Empty Category Principle)」で説明ができるという。(2) に示してあるように、対格の格助詞（その本を）は動詞句内（網掛け部分）に存在するため脱落が可能であるが、主格の格助詞（ジョンが）は動詞句外に存在するため脱落ができないという。

---

2) 文中のアスタリスク (\*) は、当該の文が不自然または不適格であることを示している。また、 $\phi$  は脱落した要素であることを示している。

- (2) [IP [KP [K' [NP ジョン] [K φ]]] [I' [VP [V' [KP [K' [NP その本] [K φ]]]  
[v 読ん]] [I だ]]]

(Fukuda, 1993: 171 (9) および Kanno, 1996: 320 (5) をもとに作成)

上記の言語事実をもとに、Kanno (1996) は、(3) に示す4つの文タイプを用意した。

- (3) a. 鈴木さんはどのビールφ飲みましたか？  
b. \*どの学生φビールを飲みましたか？  
c. どのビールφ飲みましたか？  
d. \*どの学生φ飲みましたか？

(Kanno, 1996: 321-322, 原文ローマ字)

(3a)は2つの項がある文で、対格の格助詞「を」が脱落した文である。(3b)も2つの項がある文であるが、主格の格助詞「が」が脱落した文である。(3c)は1つの項がある文で、対格の格助詞「を」が脱落した文である。(3d)も1つの項がある文で、主格の格助詞「が」が脱落した文である。(3a)および(3c)は自然な文で、(3b)および(3d)は不自然な文である。

実際の実験では、各タイプに4つのトークンを用意し、合計で16文の実験文を参加者に提示した。参加者は、各実験文を読んで、「1 (不自然)」「2 (どちらとも言えない)」「3 (自然)」の3段階で判断をするように指示された<sup>3)</sup>。

表1は実験結果のまとめを示している。「1 (不自然)」から「3 (自然)」で判断しているので、「1」に近づけば「不自然」という判断、「3」に近づけば「自然」という判断を示したことになる。2つの項がある文における格助

3) なお、「1 (不自然)」と判断した場合には、どのようにすれば自然になるかを書くように指示していた。

詞の脱落 (Type 1 と Type 2) についても、1つの項の文における格助詞の脱落 (Type 3 と Type 4) についても、学習者・母語話者ともに、主格の格助詞は脱落すると不自然であるが、対格の格助詞は脱落しても自然であるという判断をしていることが分かる。学習者内および母語話者内では、適格文と不適格文との間に統計的に有意な差が確認できたという。しかし、学習者と母語話者との間で統計的に有意な違いは確認できなかったという<sup>4)</sup>。

表 1 平均値

|                 | 学習者  | 母語話者 |
|-----------------|------|------|
| Type 1          | 2.4  | 2.6  |
| Type 2          | 1.76 | 1.36 |
| Type 1とType 2の差 | 0.64 | 1.24 |
| Type 3          | 2.58 | 2.86 |
| Type 4          | 1.64 | 1.31 |
| Type 3とType 4の差 | 0.98 | 1.55 |

(Kanno, 1996: 324, Table 2, 原文ローマ字)

Kanno (1996) は、実験結果を踏まえて、初級の第二言語学習者であっても普遍的な言語知識を有していて、その言語知識は第二言語に特有の言語現象であっても有機的に作用すると論じている。つまり、格助詞のシステムが無い英語を母語とする日本語学習者は、初級レベルであっても日本語の格助詞のシステム (格助詞脱落の規則) を無意識的に使用できていたことを示している。

なお、Kanno (1996) は、後半で教科書での格助詞の使用頻度や脱落頻度の調査、日本語教師へのインタビューも行っているが、実験結果に影響を及ぼす可能性は低いと述べている。

4) 適格文と不適格文の差については、学習者よりも母語話者の方が大きい<sup>4)</sup>が、統計的には有意な結果ではなかったと報告されている。

#### 4. Kanno (1996) の批判的検討

Kanno (1996) は、日本語を第二言語とする学習者を対象に、普遍的な言語知識の有効性を実証的に検討したパイオニア的研究である。特に、初級学習者を対象に行った研究で、これほどクリアな結果が得られたものは少ないため、貴重なデータである。初級学習者である以上、限られた語彙知識・文法知識しか有していないにもかかわらず、母語話者と遜色ない振る舞いを示したということは、すなわち「教えられていないにもかかわらず身に付いている言語知識」であると考えられる。

しかし、Kanno (1996) には、検討の余地も多数残されている。まず1つ目は、実験手法に関するものである。たった16文の実験文であり、1つのタイプを調べるのに4文しかないのは、最近の実験手法では考えにくい<sup>5)</sup>。また、完全なミニマルペアを提示していたわけではないが、類似するものを複数回提示していたため（例：ビール・飲む）、提示順による回答の影響も考えられる。いわゆるラテン方格法 (the Latin square design) で実験をデザインすることで、より客観性の高い実験になり得る。

2つ目も実験方法に関わることであるが、格助詞の脱落は話しことばに特化した現象であり、書きことばで格助詞を脱落させることは無い。Kanno (1996) は、いわゆるペーパー&ペンシル形式の実験であり、印刷された実験文を読んで、判断するものであった。話しことばを目で見て（読んで）判断するタスクは、現実世界とのギャップがある。この点を改善するためには、実験自体をリスニング形式の実験にすることが考えられる。そうすることで、より信頼性の高い結果が得られる可能性がある。また、1文提示だけではなく、2人の話者の会話形式にすることで、さらに現実性が増すと考えられる。

3つ目は、実験項目の言語構造に関する問題である。Kanno (1996) では他動詞文しか扱っていなかったが、自動詞文、特に非能格動詞と非対格動

5) ただし、たった16文だけでクリアな結果が出せたのも事実である。

詞に着目すると、実験結果をさらに支持する研究になり得る。非能格動詞も非対格動詞も自動詞であるため、文中に現れる項（主語位置に現れる名詞句）は1つのみである。しかし、両者は「主語名詞句＋動詞句」という構造をしている点では共通しているが、主語名詞句の元位置に違いがあると言われている<sup>6)</sup>。

(4) は非能格動詞の例である。主語位置の名詞句はもともと主語位置に生起しているため、動詞句内に存在しないため、格助詞が脱落すると不自然になる。他方、(5) は非対格動詞の例である。主語位置の名詞句はもともと目的語位置に生起し、それが主語位置に移動すると想定されている。したがって、主語名詞句は元位置では動詞句内に存在していたため、格助詞が脱落しても自然になると考えられる。

- (4) a. 太郎が走った  
b. [TP [NP 太郎が<sup>s</sup>] [VP 走った]]  
c. \*太郎 $\phi$ 走った
- (5) a. 窓が割れた  
b. [TP [NP 窓が<sub>i</sub>] [VP [NP  $e_i$ ] 走った]]  
c. 窓 $\phi$ 割れた

4つ目も言語構造に関わるものであるが、Kanno (1996) で使用されていた他動詞は、全て有生名詞と無生名詞の組み合わせに関するものであった（例：飲む、食べる、見る、書く、作る、など）。1つの項がある他動詞文で、有生名詞と有生名詞の組み合わせによるものを使用し、1つの項がある実験文を作成すると、(6) のようになる。

---

6) 英語を母語とする日本語学習者を対象に非能格・非対格動詞の言語知識を調査した Hirakawa (2001) では、第二言語学習者の非能格・非対格動詞の使用はランダムではなく規則的なものであることを示している。

- (6) a. 太郎が花子を叩いた
- b. \*太郎 $\phi$  (花子を) 叩いた
- c. (太郎が<sup>s</sup>) 花子 $\phi$  叩いた

(6b) も (6c) も主語位置に有生名詞があるので、文だけを見るといずれも動作主と解釈される可能性があるが、例えば、絵で「太郎が花子を叩いている写真」を提示して、「太郎 $\phi$  叩いた」という文と「花子 $\phi$  叩いた」という文を与えられた場合、(6b) のは不自然で、(6c) は自然になるということが予測できる。

## 5. 日本語教育への応用可能性

本節では、節タイトルに「応用可能性」という文言を含んでいるが、どのように教えるかではなく、どんなことに気を付けて学習者の言語知識を探っていくかについて考えていく。

第二言語として日本語を習得する上で、格助詞は混乱を招く項目の一つである。しかし、格助詞の脱落に関して、「教えられていないにもかかわらず身に付いている言語知識」があることは事実である。言語学的アプローチの第二言語習得研究は主に各文法項目に着目していることから、その研究成果をもとにした大規模な教授法や教材の開発は難しい。しかし、各文法項目については、深い洞察が得られており、「教えなくてはいけない項目」と「教えなくてもよい項目」に類別することは可能になる。つまり、母語に存在しない文法項目で(正の)言語転移が期待できないものについては、普遍的な言語知識がはたらくか否かに応じて、丁寧な指導が必要な項目もあれば、簡単な説明で理解できる(または説明不要でも理解している)項目もあるということを示唆している。

言語学的アプローチの第二言語習得研究を言語教育に応用しようという流れも存在し、その先駆けとしては Whong, Gil, & Marsden (2013) が挙げられる。あらゆる言語の話者を対象に、さまざまな文法項目の第二言語習



得研究を行い、それをもとに、言語教育の場面にどのような貢献ができるかを検討した論文集で、「どのように教えるか」ということではなく、「何を教えるべきか」ということに焦点を当てている。さらに、2020年には John Benjamins 社から *Pedagogical Linguistics* というジャーナルが刊行され、創刊号の Editorial では、Trotzke & Rankin (2020) としてジャーナルの編集方針を述べており、まさに前述したような、「第二言語習得研究で得られた知見から、何を教えるべきか」に焦点を当てている<sup>7)</sup>。

より効果的な言語教育を提供するためには、学習者が持つ第二言語の知識を解明することが不可欠である。地道な作業ではあるが、各文法項目について、普遍的な言語知識がはたらくか否かを、母語話者別・レベル別に記述していくことが必要であると考えている。

## 参考文献

- Fukuda, M. (1993). Head governed and case marker drop in Japanese. *Linguistic Inquiry*, 24 (1), 168–172.  
<https://www.jstor.org/stable/4178806>
- Hawkins, R. (2001). *Second language syntax: A generative introduction*. Blackwell.
- Hawkins, R. (2019). *How second languages are learned: An introduction*. Cambridge University Press.
- Hirakawa, M. (2001). L2 acquisition of Japanese unaccusative verbs. *Studies in Second Language Acquisition*, 23 (2), 221–245.  
<https://doi.org/10.1017/S0272263101002054>
- Kanno, K. (1996). The status of a nonparametrized principle in the L2 initial state. *Language Acquisition*, 5 (4), 317–335.  
[https://doi.org/10.1207/s15327817la0504\\_3](https://doi.org/10.1207/s15327817la0504_3)
- Slabakova, R. (2016). *Second language acquisition*. Cambridge University Press.
- Trotzke, A. & Rankin, T. (2020). Editorial: Introduction to pedagogical linguistics. *Pedagogical Linguistics*, 1 (1), 1–7.  
<https://doi.org/10.1075/pl.19015.tro>
- White, L. (2003). *Second language acquisition and Universal Grammar*. Cambridge University Press.

---

7) *Pedagogical Linguistics* の Volume 1 Issue 1 は無料で公開されている (<https://benjamins.com/catalog/pl.1.1>)。

Whong, M., Gil, K-H., & Marsden, H. (Eds.) (2013). *Universal Grammar and the second language classroom*. Springer.